



札幌交響楽団をおおいに応援しよう！

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。
「高橋・日浦法律事務所」代表。

私は中学生のころ道東の街・釧路市に住んでいた。当時の中学生が釧路から札幌に行き来するなどということはほとんどなく、札幌までの道のりはとても遠い感じがしていた。当時、ヴァイオリンを習っていた田舎育ちの私にとっては、札幌交響楽団（札響）は、「ほくでんファミリー・コンサート」と結びついたオーケストラという

ことにはほとんどなく、札幌までの道のりはとても遠い感じがしていた。当時は、ほくでんファミリー・コンサートと結びついたオーケストラという私の私にとっては、札幌交響楽団（札響）は、「ほくでんファミリー・コンサート」と結びついたオーケストラとい

位置づけで、定期的に札幌に来て演奏を聴けるものではなかつた。その後、釧路市から高校入学のため函館市に移り住み、大学入学のため東京に上京、平成6年4月に札幌弁護士会に登録し、初めて札幌市に住むようになつた。弁護士になつて初めて札幌交響楽団の演奏を聴いたのは、若杉弘先生のマーラーの交響曲第9番二長調だつた。大学オケのコンマス主任にヴァイオリンを指導下さつた若杉弘先生のマーラーの交響曲第9番二長調だつた。大学オケのコンマス主任にヴァイオリンを指導下さつた若杉弘先生が、東京芸術大学卒の安宅賞も受賞なされた先生で、当時、東京都交響楽団に所属されていた。そのころ、若杉弘先生が都響の音楽監督に就任なされると聞いていて、私からすれば神様のような存在であつたら、久し振りに若杉先生のお姿を見て手を合わせ、背筋を伸ばして聴いた記憶がある。大学オケの音楽監督であつた小松一彦先生も1988年から1992年までの間、札幌交響楽団の専属指揮者であり、私がコンマス在任中の頃にも札響のスケジュールに大学オケのスケジュールを合わせた記憶がある。札幌に転居してから札響の定期会員になつてキタラに通つたこともあつたが演奏会にはなかなか行けなかつた。演奏会の開始時間の頃に仕事が終わつていることはほとんどなかつた。私の大学でも、大学OBオケは複数あるが、自分で事業を行つてている先輩後輩の中で、

今でもどこかのオケに所属して現役で楽器を奏でている者は残念ながらほとんどない。よほどの能力がある者でなければ、オケと経営は、時間の面でも心の面でも両立できないのかもしれない。

さて、思い出話はこのくらいにして、札幌交響楽団は、令和3年に創立60周年を迎えるが、このコロナ禍の下、令和2年2月22日の演奏会を最後に演奏会はすべて中止となつてしまい、演奏会中止に伴う損失も1億円を超えると言われている。そこで、札響では、令和2年5月11日、クラウドファンディングによる支援を求め、令和2年8月時点で数多くの市民・団体から合計金2667万円の支援が寄せられた。そして、ついに、令和2年12月26日、27日に札幌文化芸術劇場にて、秋山和慶先生の指揮で「札響の第9」と銘打つたコンサートも開催して無事終えることができたのである。

令和2年12月21日、札響の楽員の方々が第9の練習の合間に時間を空けて下さり、芸術の森アートホールにて我が母校の校歌・賛歌を演奏し録音までして下さつた。札響のクラウドファンディングの中に支援金100万円で「あなたの母校の校歌を録音し母校へプレゼント」という企画があり、数多くの同窓生やPTAの皆様にお声をかけ、何とかギリギリセーフで100万円を集めることができた。

このクラウドファンディングにて校歌を札響に演奏して貰つた学校は4校あつた。コロナ禍のこともあり人数限定で各校の関係者が芸術の森アートホールに入ることができた。母校の校歌をプロオケの生演奏で聞くことができほどまでに素晴らしいものなのかと思いながら時間を過ごした。特に「ラ・サール贊歌」は、全世界100校を超えるフ・サール高校、ラ・サール大学共通の曲であり、円光寺雅彦先生からも素晴らしい曲であるとお褒めの言葉をいただいた。この曲は、ラ・サール同窓会のアジア大会や世界大会において、様々な国から参加した様々な言語を話す卒業生が世界大会において、様々な国から参加した様々な言語を話す卒業生が円陣を組み、肩を組み合つて歌われると聞く。アジア大会に参加した先輩からの話では、肩を組んだ隣りの男性がどこの国出身で何語で歌つているのか分らないものの、同じメロディーで歌つていると涙が止らなかつたそうである。札響から頂いた素晴らしいこのプレゼントは、何とかして世界中のラサーリアンが聴けるようにしたいと願つていて。遅まきながら、私は定期会員に戻り、札響への支援を再開したいと思う。